

令和2年度 新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン 在宅・地域医療実習

実習生：西村 考真

実習先：たくま医院、奥平外科医院、谷川放射線科胃腸科医院、安中外科・脳神経外科医院

実習期間：令和2年12月15日～令和3年1月22日

実習生感想

私は現在、放射線科医として働いており患者さんと接する機会は他科と比べると非常に少ない。研修医時代には退院前カンファレンスに参加する機会が何度かあり、在宅医療に移行する患者さんを見送ってきたが、その後の経過を知ることはほとんどなかった。退院した後はどのように過ごしているのか、入院中に長く接した分、気になることも多かった。今回の在宅実習で今まで気になってはいたものの知ることができなかった患者さん・ご家族の新たな生活を見ることができ、非常によい経験となった。実習を通して一番印象に残ったのは患者さんやご家族の笑顔であった。何か楽しみや目標を持たれている方が多く、在宅での生活は充実しているようであった。病院で宣告されていた余命より長く生きることもあるとのことで、もちろん様々な方の支えあつてのことと思うが、在宅医療というのは奇跡とも呼べるような何か神秘的な力があるのかもしれないと感じた。

①たくま医院

初日は強い寒気が流れ込み、長崎で初雪が観測されるという状況の中の実習であった。まず詫摩先生から在宅医療について説明していただき、改めて在宅医療とは何か、そして現状や具体例などについて理解することができた。

ALSで在宅人工呼吸器を使用していた60代の患者さんがいたが、在宅人工呼吸器が想像していたものよりずっと小さくなっていて、お手製の棚に入るほどのコンパクトさであり一つの家電のように日常に溶け込んでいて驚いた。持ち運びも可能で以前雲仙に旅行に行ったとのこと。胃瘻も造設されていたがほぼ使用せず、口から焼き鳥でもピザでも食べると聞きさらに驚いた。また退院してからベッドの位置を変えるなど部屋の模様替えを何度か行って病院のようにずっと同じ天井を見ないようにするなど、いかに病院らしさをなくすかという工夫をされており在宅ならではのと思った。

実習の最後は90代の老夫婦の患者さん宅であったが、お二人とも高齢ながらとてもお元気で若々しかった。旦那さんは毎日飲むお酒が楽しみなようで、鎮痛薬を注射した後にすぐ「お酒は1時間くらいしたら飲んでいいですか」とニコニコしながら聞かれており思わずこちらも笑顔になった。何か楽しみを持つことが長生きの秘訣だと身をもって教えていただいた。



②奥平外科医院

奥平先生のもとでは計3回実習をさせていただいたが、最初の2回は普段一緒に訪問診療される看護師さんが諸事情で休まれていたため、先生と自分の二人きりでの訪問診療であった。特に初日は自分もやり方がわかっておらず足手まといになることが多かったように思えたが、そのような中でも手技の一つ一つや患者さんの情報について丁寧に説明していただいた。先生はタブレット端末に患者さんのバイタルや診察内容などを記載し、あじさいネットにアップロードされていた。実際にあじさいネットを使用して他院のカルテ記事や画像を参照させていただいたが、予想以上に見やすく、特にCTやMRIなどの画像をスムーズに参照することができたのには驚いた。病院のカルテとほとんど同じことが患者さん宅でできるのは画期的であり、お互いにとっても非常にメリットが大きいと思われた。

ALSの患者さんの気管切開チューブ交換を手伝わせていた



だいたが、「痛い」や「きつい」といった意志をすぐに伝えることができないため、表情の変化に注意することが大切だと実感した。そして終わった後に笑顔があった時はこちらも嬉しい気持ちになった。

2021年御年100歳になるが一人暮らしをされている患者さんがいた。受け答えもしっかりされており、多少息は上がるものの、短い距離なら介助なしで歩かれる様子には驚くと同時に力強さを感じた。

また退院前カンファレンスにも参加させていただく機会があり、在宅医療というのは患者さん・ご家族そして多職種からなる一つのチームだと改めて気づかされた。

③谷川放射線科胃腸科医院

谷川放射線科胃腸科医院では何名か在宅診療専任の先生がいらっしや、それぞれ分担して訪問診療を行っていた。今回私は本田英雄先生、津田一英先生に同行させていただいた。

同院では院内のカルテと連動したタブレット端末を使用しており、カルテ記載はもちろん薬の処方や検査のオーダー、紹介状の作成までできるシステムであった。実際に訪問した際に指にあかぎれがあった患者さんに軟膏を処方したり、採血結果が気になっていた患者さんに結果を見せたりなど大変有用なシステムだと思った。

グループホーム坂の上の紫陽花に訪問することがあったが、同施設は昔ながらの民家を改修した造りになっており、床は畳で障子があるなどグループホームとしては大変珍しかった。しかしかえてそのような造りの方がより自宅らしく過ごせるのではないかとわれ、心なしか患者さんも穏やかな表情をされていた。

90代の遺伝性出血性毛細血管拡張症の患者さんはHbが常に5~6 g/dlと低く、毎月の輸血が必要であった。輸血後に急性期の副作用が出ないか、適宜バイタルを測りながらしばらく様子を診ていたが、自分たちはこの後も訪問する患者さんが多くいたため、輸血が終了するまでの残りの観察は訪問看護師さんをお願いするという、まさにチームとしての連携を感じることができた。



④安中外科・脳神経外科医院

安中先生は脳神経外科が専門ということもあり、大脳皮質基底核変性症や副腎白質ジストロフィーなど専門性の高い疾患から、認知症や高次脳機能障害、末期癌など広い領域の患者さんを診られていた。また1日の訪問数も15~20名と多く、広範囲を飛び回っていたが、患者さん一人一人についてはもちろん、そのご家族のことまでよく把握されており、まさに家族全員を担当されているような印象を受けた。

実習1週間前には数年に一度の大雪があり、県内ほぼ全ての交通機関が運行休止するほどの状況であったが、安中先生は変わらず訪問診療をされており、夜中には看取りにも訪れていたのこと。長崎の地域医療にとって非常に大きな存在だと感じた。

実習の中で持続皮下点滴をされている患者さんがいた。まさしく皮下に針を刺し点滴をする方法だが、恥ずかしながらそのような輸液の方法があることを知らなかった。静脈への点滴と違い、血管を刺さないため出血や感染のリスクが少ない。また針も毎日交換する必要がなく、輸液剤を繋ぎ変えるだけで使用できるため、在宅や福祉施設入所者において大切な方法だと勉強になった。



2020年~2021年は新型コロナウイルス感染症が流行し、様々な学会や講演会などが中止やWeb開催となる中、この在宅実習も当初は延期を予想していました。このような状況の中、在宅実習を引き受けてくださった詫摩先生、奥平先生、谷川先生、本田先生、津田先生、安中先生そしてスタッフの皆様がこの場を借りてお礼申し上げます。

【今後の予定：臨床・研究等】

現在は4D-flow MRIを用いて、胸部大動脈におけるWall Shear StressやEnergy Lossなどの血流動態パラメータの強度分布解析を行っているが、今後は大動脈の石灰化の分布（カルシウムスコア）などと関連させて解析を行っていく予定である。

<実習報告会>

